

令和6（2024）年度第3回柏崎市男女共同参画審議会議事録(概要)

日 時 令和6（2024）年12月17日（火）15：00～16：55

会 場 柏崎市役所 4-3、4-4会議室

出席委員 田村会長、板羽副会長、関委員、矢島委員、桑原委員、福原委員、柄澤委員、小竹委員 8人
(欠席：飯田委員、内橋委員、片山委員、宮崎委員 4人)

事務局 総合企画部 井比部長、人権啓発・男女共同参画室 大塩室長、小林主幹、平田室長代理 4人

議 事 (1) 男女共同参画に関する意識調査等の集計結果について
(2) 次期「柏崎市男女共同参画基本計画（かしわざき男女共同参画プラン）」策定の進め方について

1 開会

2 開会挨拶（会長）

11月8日の柏崎日報に「わたしの主張 柏崎・刈羽地区大会」で奨励賞を受賞した中学生の記事が掲載されていた。「無意識な偏見」として、大型犬へのイメージから社会に広がる無意識の偏見、アンコンシャス・バイアスについて真剣に意見を述べられていた。11月27日のNHKの朝の番組では、地方に住む女性の都会への流出が男性よりずっと多いということを取り上げていた。地方は男女の役割分担意識やジェンダーバイアスが非常に強く、女性はこうあるべきだという固定観念が、仕事や生き方、進学などに対して昔とあまり変わっていない。また職場での男女の役割に対する偏見も根強くあり、女性自身もそう思っていることが多いとのことである。そういう窮屈さから逃れたいと思っている女性が都会へ出ていってしまう。子育てのしやすさは、女性の都会への流出を止めることにはならないと、専門家も意見を述べていた。同時期に読売新聞に掲載された記事では、5回にわたり「地方と女性」と題して女性の都会への流出について取り上げていた。NHKの番組と同様に、地方の男女への役割分担に基づく無言の圧力、就労環境の性差、そして自分らしく生きられない実情や息苦しさなどを挙げて、ジェンダーギャップを解消するための取り組みを紹介する内容だった。内閣府が昨年12月に公表したデータ、人口戦略会議が今年4月に公表した報告からも若い女性が地方から都会に出ていく傾向が表れており、全国744自治体が将来的に消滅する可能性がある」と警鐘を鳴らしている。先に紹介した中学生の主張では、「アンコンシャス・バイアスはなくすものではなく、気付くものだと思っている」と述べられていた。長い年月をかけて定着した社会の意識を変えるのは容易ではないが、気付きということをもとに問題解消に一つ一つ取り組みながら、全ての人が活躍できる環境を整えていけると良いと思う。皆様方お一人お一人が男女共同参画について、様々な立場で発信元になっていただければありがたい。

3 次期「柏崎市男女共同参画基本計画（かしわざき男女共同参画プラン）」に関する諮問について (市長から会長へ諮問、井比総合企画部長代行)

4 議事概要

(1) 男女共同参画に関する意識調査等の集計結果について

(事務局から資料1及び参考資料1について説明)

議長 まず、市民意識調査について、意見や質問、感想などはあるか。

A委員 今回の調査からオンラインを導入したが、紙回答とオンライン回答の回答者の年代等を分析すると次回の調査につながるのではないかと思う。

調査結果から、男女共同参画に関する言葉は浸透してきているが、実際は難しいということが分かる。また、若い男性の育児参画に対する考え方については、男性の母や祖母が育児を担ってきたという自身の体験により、母親が育児を担うのが当たり前という概念が顕著に表れていると思う。

会長が紹介された地方の女性が都会に転出しているお話については、男性が理解するのは難しいということもあると思う。しかし、この1か月の間に様々なメディアで取り上げられているということであり、社会情勢として男性の方々にも関心を持ってもらいたいと思う。

そのほかには、DVに関する質問があったが、DV被害の当事者にとっては答えづらいものであり、数字だけを鵜呑みにすることはできないと思う。

また、「女性が職業をもつことについてどう考えるか」という質問からは、本来当たり前であるはずの男女平等に対し、女性へのアンコンシャス・バイアスが見え隠れするように感じる。

議長 女性が職業をもつことに対する考え方については、経年比較もあり初期の計画からの状況のまま進んできているのだと思う。今回の結果から見ても、本当に遅れているということを感じた。しかし、それが柏崎市の実態だろうと思う。そのことを少しずつでも進めていくために、この結果が次期の計画に反映されると良いと思う。

B委員 調査対象は2,000人を無作為抽出したとのことだが、年代別に同じ割合で送付した結果、回答者が高齢層に偏ったと考えてよいのか。

事務局 お見込みのとおりである。

議長 回答率が50%に満たないという状況であるのは残念なことだと思う。普段から関心を持っていないと、回答する行動に結び付かないということかと思う。

事務局 オンラインを導入した結果を年代別に見ると、70代はごく少数であったが、特に若い世代に集中したものでもなかったため、今後も引き続き取り組んでいかなければならないと感じた。

C委員 自由記載は紙の方が書きやすいと思うが、オンラインで回答する場合はどうか。

A委員 オンラインでも簡単に入力が可能である。回答方法の選択は、年代というより個人のオンラインとの関わり方で、どちらが便利と捉えるかだと思う。

議長 ほかになければ、中学生意識調査について事務局から説明をお願いする。

(事務局から資料1及び参考資料2について説明)

- 議長 中学生意識調査について、意見や質問、感想などはあるか。
- A委員 以前の調査からの質問にはなるが、女性が職業をもつことへの考え方を当然のように聞くこと自体が男女平等ではないように感じる。首都圏では「女性が大学院に進学することについてどう思うか」や、「理系に進むことをどう思うか」というような質問になってきている。地方ではそういう話すら起こってこないことが残念だと思った。柏崎には工業系の大学もあり、農業女子もいるにもかかわらず、この地に就労する女性は少ない。ものづくりを基幹産業とする自治体として意識改革が必要だと思う。
- また、学校の中では平等だと言っているのに、最後の意識のところでは平等ではないことが残念である。
- 議長 学校で男女平等の教育が進んでいることは十分承知しており、実際学校に行っても先生方は男女差がないように接していることが分かる。しかし、その子どもたちが家に帰ると違う。そのことが根底にあるので、それを飛び越えて、当たり前のように女性が職業をもつことについて問う以前の問題が地方には残っていると思う。地域性もあると思うが、私の地区では若い母親であっても旧態依然の状況であることを実感しているので、それを飛び越えるようなことは難しいと感じる。
- D委員 我が家は両親が共働きだったため、女性も働くことは当たり前で、自分が出産後に仕事に復帰することも当然だと思っていた。女性が働くことや家庭の中の役割分担については育ってきた環境が子どもたちの潜在意識に大きく影響を与えると思う。
- E委員 我が家では、家事は夫の方がより多く負担している。子どもたちもお父さんがやるのが当たり前と思っている。息子からは「自分が親になったらお父さんと同じように家事をするのか」と聞かれることもあるが、「奥さんと話し合ってやろうね」と話している。育成環境に影響を受けることは理解できる。
- F委員 学校では、管理職に女性が増えてきたと感じている。子どもたちも学校の中だけを見ると、男性優位とは思わないかもしれない。しかし、会長がおっしゃるように、家庭では違うかもしれないと思った。夫が単身赴任で平日は不在となれば、共働きであっても妻が家事をやることになり、それが当たり前というように子どもたちに思わせてしまっているかもしれない。
- G委員 仕事の場面で都会と地方の違いを感じることもある。例えば、会議で東京等に行ったとき、家庭のことは特に尋ねられず仕事の話ができるが、地方では「子どもの面倒を誰が見ているか」「子どもが可哀そう」というようなことを言われることが多く、仕事がしづらいつと感じることがある。また、女性の家庭と仕事のバランスでは、仕事の割合が多くなることについて家族から理解を得るのが難しいとも感じる。
- B委員 夫婦共働きなので、お互いに良いバランスでやっていると思う。両親は、父が単身赴任だったこともあり、家事は母の役割だったが、母からは父のようになら

ないようにと言われたし、自分でもそう思っている。G委員のおっしゃった、誰が子どもの面倒をみるのかということについて、東京では心配しなくていいような手段があり、それを選択できるということだと思う。地方では家庭内の誰かがやらなければならない状況にあり、女性が担うイメージが強くあるということだと思う。子どもの預け先があるかないかで違うのではないかと感じた。

D委員 家庭内の家事分担に関して一番大事なことは、夫婦が納得して落ち着いているということであり、その姿を子どもたちに見せてあげることではないかと思った。

議長 中学生に意識を問うことと同様、市民意識調査にも想定した質問を加えていけるといいと感じた。

続いて、事業所調査について、事務局から説明をお願いします。

(事務局から資料1及び参考資料3により説明)

議長 事業所調査について、意見や質問、感想などはあるか。

D委員 調査項目は、全国的なものなのか。また、今回調査した項目は次回必須とし、経年比較するという決まりがあるか。

事務局 調査項目は本市独自のものであり、調査実施の際に追加や削除等について検討した上で決定している。

D委員 承知した。

A委員 女子学生が戻って来て働きたいと思うまちと事業所は、人材を確保しやすく、事業としても発展していくわけだが、自由意見では、規模の大きい企業ではできることも、中小企業では経営状況が良好かどうかということが重要な視点になっていることが記載されていた。ワーク・ライフ・バランスに取り組む意義を、経営者からも理解していただかなければならない。商工会議所や労働組合などからの働き掛けや、柏崎市が活性化するために若い女性から戻ってもらうような取組について、本審議会でアピールすることも一つの方法かと思う。

市の実施している女性リーダーを育成するセミナーについては、育成する側の教育も必要と考える。柏崎に戻って働き、家庭を持ち、最後まで過ごす人材を作ることが男女共同参画の基本だと思う。

C委員 市民意識調査の自由記載にあるように、魅力あるまちにするには男女共同参画だけでなく地域全体で進めていく必要がある。地元の大学がありながら若者を留める方法がないのか、男女共同参画から発信してよりよい魅力のある柏崎を作るところまで発展させないと男女共同参画の意識というものなかなか出てこないのではないかと思う。また、中小企業も市の助成金を上手く活用できるよう、周知していくことも大事だと思う。

議長 ワーク・ライフ・バランスの取組について聞く質問では、「ワーク・ライフ・バランスについて知らない」という答えを選んだ事業所があることに驚いている。せめて、「取り組んでいるがなかなか効果が出ない」の回答が多くなってほしいと思う。

(2) 次期「柏崎市男女共同参画基本計画（かしわざき男女共同参画プラン）」策定の進め方について

（事務局から資料2について説明）

議長 事務局の説明について、質問や意見はあるか。

事務局 今ほど説明した計画の名称に「第六次」と入れること、また、「かしわざき男女共同参画プラン」を削除することについても検討していただきたい。

議長 初期の計画に携わった経験もあり、プランの方が呼びやすいと思うが、皆さんいかがか。「第六次」を加えることについては、管理しやすさから付けた方が良いと思う。

D委員 他市には第何次とあるようだ。プランという名称に特に意味がないのであれば取ってもいいように思う。

事務局 初期の計画が「男女共同参画プラン」であったことから、そのまま残り続けたものと推察する。

B委員 横書きなので英数字の「第6次」が良いのではないか。

A委員 英数字の方が目立って見やすいと思う。「かしわざき男女共同参画プラン」は「柏崎市男女共同参画基本計画」として良いのではないか。

議長 他の方も次期計画名称を「第6次柏崎男女共同参画基本計画」とすることによってよしいか。

全委員 異議なし

議長 それでは、本日の議事はこれで終了したい。

5 その他

- ・意識調査の集計結果及び次期計画の体系に関する意見等について、1月10日までに事務局へ提出していただきたい。意見がない場合は、その旨連絡をいただきたい。
- ・第4回目の審議会は、2月後半の開催を予定している。

6 閉会（副会長）

様々な立場の方の御意見が聞けるのは委員の役得であり、貴重な経験をさせていただいていると思う。来年度は次期計画の本格的な策定となるが、これまでの会議や意識調査の結果などを踏まえ、皆様からも御意見をお寄せいただきたい。